

## 早稲田大学 政治経済学部 総合問題(日本語セクション) 講評

出題形式	マーク・記述併用
試験時間	120分(日本語による長文読解1題+英語による長文読解1題+英作文1題)
特徴・その他	選択問題5問、記述問題(50字以内と200字以内)2問で合計7問。去年より記述問題が一問増加した。また帯グラフ・折れ線グラフ・ヒストグラムなど多様なグラフが資料として挿入されており、それら複数のグラフを合わせて判断する問題も出題された。内容としては「経済格差」と「自己責任論」の関係性などについて述べた二つの文章を読み取らせる「複数テキスト」の問題となっており、「大学入学共通テスト」の問題傾向を昨年に引き続き意識したものと思われる。試験時間60分は適当であると思われる。

## 〔大問別講評〕

番号	出題内容	コメント	難易度
I	「経済格差と自己責任論の関係性」をテーマとした二つの文献と数種類のグラフを利用した文章問題	1:空所補充問題であるが、空欄の前後に注目して欲しい。「所得階層」を「実額」で区分できない理由なので「貨幣価値」が関係していることは分かる。また、図2は1975年から2015年の間の所得階層別の意識変化を表したものである。つまり貨幣価値と「時間」が関係することになる。したがって正解はロ。2:ヒストグラムから所得中央値(計算方法は問題文Aの四段落参照)を探し、そこから貧困層(問題文Aの注1を参照)の人数をグラフごとに計算していけばよい。正解はニ。3:問題文Aの五段落の「豊かな人々は自分たちの豊かさを～よく分かっていたといえることができる。」から、六段落冒頭の「ところが」を受けて反対の内容が空欄②に入ると考えられる。そうすると内容的に正しいのはハとなる。4:「データ」から「判断できないもの」という設問の要求に注意。ハは「自己責任論を肯定する傾向」が「過去と近年の比較」の形では示されていないので、これが一つ目の正解。ニは男性と女性で比較して、男性の方が富裕層が多いことを証明するデータがグラフの中にないのでこれが二つ目の正解。またイであるが、自己責任論に肯定的な人が格差拡大に対して肯定・容認しやすい事は図4・5から分かるが、それが「富裕層においても貧困層においても」同様に言えることなのかは読み取り切れないので、これが三つ目の正解。したがって答えはイ・ハ・ニとなる。5:ロは問題文Aの最終段落にあるが、Bには記述が無い。ハはどちらにも記述が無い。ニは「日本とアメリカ」を比較している記述がどちらにも無い。	やや易

番号	出題内容	コメント	難易度
I		<p>イは問題文Bの冒頭の内容と同じ(「再配分」を「所得格差是正」と置き換えればよい)だが、Aにはそれらしい記述が無く、ホもBの一段落後半に記述があるが、Aには無い。したがって正解はイとホ。6:「問題文Bの記述に基づいて」という設問の要求に注意。二段落で「経済的成功の原因に実証性のある裏付けが無い」と「(したがって)各自が勝手に自身の見方や考え方を採用している」という内容がある。このような状態では誰かに責任を押しつけることもできなくなるので、「自己責任論」が採用されるという流れでまとめればよい。7:自己責任論の功と罪をそれぞれ端的にまとめる必要がある。罪に関しては問題文Aの最終段落を参照すると分かりやすい。功に関しては「高所得者の意欲維持(問題文B参照)」「貧困層の格差容認(不満の押さえ込み)(問題文A参照)」あたりをまとめよう。200字以内に縮約するのが少々困難だが、端的で明快な表現を選べば、対応は可能である。</p>	

[総合コメント]

設問中にあるヒストグラムも合わせて合計6つのグラフを素早く正確に読み解くことが鍵となってくる。資料型問題に慣れていない受験生は少々骨が折れたかもしれない。また記述問題が2問になったことも合わせると昨年より若干時間的には厳しくなったかもしれないが、それでも早大受験生なら対処して欲しい範囲内とも言える。また問5のようなAとBの問題文を比較しながら対処する設問は「大学入学共通テスト」でも問われる複数テキスト型問題において必須の形式なので、二つの文章の共通点・相違点に関しては常に意識してもらいたい。